特集・事故率低下のための種豚導入術

種豚導入時の注意点

茨城県・㈲バリューファーム・コンサルティング　呉　克昌

導入先の条件

導入する種豚や精液はできるだけ健康状態の高いものであることが重要です。具体的にはオーエスキー病はもちろんのこと、PRRSも陰性でなければなりません。

PRRSウイルスは変異株が非常に多く、自分の農場がPRRS陽性であっても他の株に対しての免疫は不十分です。新たなPRRSウイルス変異株が農場に入ると甚大な被害をもたらすので、導入先はPRRS陰性農場でなければなりません。精液によってもPRRSは伝播される危険性があり、感染した雄豚は長期間、不定期に精液中にPRRSウイルスを排せつします。

こうした心配のない種豚や精液を導入するためには、しっかりとした防疫プログラムを実施している、信頼のおける種豚供給会社から導入することです。

また、導入する種豚や精液の健康状態の問い合わせに対して、オープンで正直な情報提供をしてくれる相手でなければなりません。

こうした質問は往々にして専門的になることがありますから、先方の専属獣医師か、かかりつけの専門獣医師に問い合わせることが一番良い方法です。さらに、自分の農場にもかかりつけの獣医師がいれば、獣医師同士で連絡を取り合ってもらうのが、正確な情報を得るのにもっとも信頼のある方法です。

以上、種豚導入のポイントを**表1**に示しました。

隔離・検疫

導入種豚は直接、農場に入れてはいけません。専用の隔離・検疫豚舎に収容し、最低三週間の隔離と観察、必要に応じた検査を実施することが重要です。

上述した条件を満たして種豚を導入しても、輸送中に病気に感染することや、不幸にして出荷直前に種豚農場に病気が入り、導入豚がその病気に対して潜伏期間であることがあるからです。

また、オーエスキー病撲滅プログラム実施農場では既存豚と接触することなしに導入時にワクチン接種することが重要となり、そのことが隔離の理由の一つにもなります。三週間の隔離・検疫期間中に、導入豚の健康

表1　種豚導入のポイント

●できるだけ健康な種豚、精液を導入すること。
●PRRS陰性農場から導入すること。
●信頼のおける供給者から導入すること。
●オープンで正直な情報を提供してくれる相手であること。

を観察し異常がないことと、導入二週間後に必要な検査（例えば、オーエスキー病やＰＲＲＳの抗体検査）を実施して検査結果を得てから農場に導入することが、経営のリスクマネージメントとして重要です。

隔離・検疫には何も立派な豚舎が必要なわけではなく、一定の条件を満たせば、納屋や使っていない堆肥場などで十分です。その条件とは、まず、既存豚舎から最低一五ｍ離れていることです。ＰＲＲＳウイルスは豚舎間の空気感染は起こりにくく、この距離で十分だからです。

そして専用の衣服、長靴に交換し、手洗い・消毒を実施し管理を別にすることです。専任の人でなくても一日の作業の最後に管理するとか、隔離・検疫舎で管理した後、最低、衣服、長靴の交換と手洗い・消毒を実施してから既存豚舎を管理することはできます。

隔離・検疫のポイントを**表２**に示しました。

表２　隔離・検疫のポイント

- ３週間の隔離・検疫の実施。
- 隔離・検疫期間中に健康の観察と必要な検査を実施し、異常がないことを確認してきてから既存豚舎に導入すること。
- 隔離・検疫豚舎は既存豚舎から15m以上離して設置すること。
- 隔離・検疫豚舎の管理には、最低、衣服、長靴の交換と手洗い・消毒を実施すること。

馴致

隔離・検疫に引き続き、あるいは場合によっては隔離・検疫期間中から、自分の農場にある病気に対する免疫を付与する一連の作業を実施します。この作業を馴致と呼びます。

馴致の方法には自然感染による方法とワクチン接種による方法とがありますが、ほとんどの農場で両方を併用します。

自然感染による馴致の場合、菌やウイルスを一定期間排せつしますので、その間は既存豚舎に移動しないことが重要となります。馴致に必要な期間は十分に免疫がつくのに必要な時間と、菌やウイルスが排せつされなくなる時間を考えて、長い方の期間を設定します。

馴致は、既存豚舎とは別の豚舎で実施します。それは馴致期間中に豚から排せつされる菌やウイルスの影響から既存豚を守るためです。従って、隔離・検疫豚舎を馴致に併用する場合も多くあります。後述するように、ＰＲＲＳ陽性農場では隔離・検疫、馴致期間を合わせると三カ月程度の長期間となります。また、作業の性格上、オールイン・オールアウト飼育をしたいので、種豚導入方法を一カ月に一回導入する方法ではなく、日齢差をつけて（例えば一五〇日齢、一二〇日齢、九〇日齢の三グループ）、三カ月に一回の導入とすることなどを考えるのが良い方法です。

ＰＲＲＳ陽性農場では特に自然感染による馴致が重要です。その農場にある自然株に対して免疫を持たせることが必須で、ワクチンは補完的に使用する場合があります。上述したようにＰＲＲＳウイルスには変異株が多く、一つの株に対する免疫が他の株に対しては不完全である

からです。また、ＰＲＲＳウイルスに対する免疫が得られるには四週以上と、通常よりも長期間を要し、さらに、ウイルス排せつ期間は六〇日以上あることがあります。従って、ＰＲＲＳ陽性農場では最低六〇日間、できれば九〇日間の長期間の馴致期間を取ってから既存豚舎に移動することが重要です。

しかし、その自然株に免疫を持てば、同一株には再感染しないことがこのウイルスの特徴で、すべての導入豚に対して農場に存在するＰＲＲＳウイルスへの十分な免疫を持たせることが、ＰＲＲＳ制御の重要ポイントです。

馴致のポイントを**表3**に示しました。

表３　馴致のポイント

●馴致は自然感染とワクチン接種を併用すること。
●馴致期間は免疫獲得時間と菌・ウィルスの排出停止時間の長いほうで設定すること。
●馴致は既存豚舎とは別な豚舎で実施すること。
●ＰＲＲＳの場合は自然感染を前提とし、長期間の馴致期間を設定すること。
●可能であれば、オールイン・オールアウト飼育で実施し、導入方法の変更も検討すること。

獣医師との連携

以上、簡単に述べてきましたが、種豚導入時の注意点としては、正確な情報を収集すること、導入豚の健康チェックをしっかりとすること、農場にあった馴致期間、方法を設定し実施することが重要となります。これらの事柄は獣医師との連携によりうまく行くでしょう。

ぜひ、かかりつけの獣医師を持ち、獣医師と知識の経験を最大限に活用し、生産の安定につなげることをお勧めします。